

おおさか  
KEY  
わーど  
第8回

# 晩秋の風情を求めて神農さんへ

くすだま飾りと張子の虎のにぎわい



くすりの道修町資料館展示物より「丸薬製造機」



少彦名神社境内より「張子の虎」

道修町(大阪市中央区)は、今も昔も薬の町である。有名な製薬会社が並び、江戸時代には、中国から長崎に荷揚げされた漢方の薬材の価格も、道修町で決められたという。その商いの町が、年に一度、華やかな祭の色彩でにぎわう。少彦名神社の神農祭である。同社は、日本の薬祖神である少彦名命と中国の医薬の神、神農氏を祭祀し、健康増進や商売繁盛を祈願する人々の崇敬をあつめている。

大阪の祭りは、1月の今宮戎神社の十日戎ではじまり、11月22日、23日に催される神農祭で終わる。そこで神農祭は「とめの祭り」とも呼ばれる。現在、約400社の薬業関係企業が構成する「薬祖講」が、祭の維持運営をおこない、平成19年、「少彦名神社薬祖講行事」として神農祭は、大阪市無形文化財(民俗)に指定された。

最近是不況もあってか、数が少し減っているように見えるのが残念だが、道修町の通りに沿って、吹き流しと製薬会社の薬箱を竹ざおに吊り下げた、くすだま飾りがならぶのが美しい。仙台などの夏の七夕と季節は違うが、商都を代表する晩秋の風物詩である。

有名なのが、笹に吊るされた張子の虎(神虎)である。安政5年(1822)に「虎狼痢」(コレラのこと)が流行した時、道修町の薬種仲間が、疫病除薬として虎の頭骨などを調合した「虎頭殺鬼雄黄圓」という

丸薬をつくり、少彦名神社の神前で祈祷して患者に施した。そのとき合わせて配布されたのが、「張子の虎」であった。薬種商には風流人も多く、青木月斗、芦田秋窓、島道素石などの俳人を生み出した。彼らも神農祭や張子の虎を句に詠んでいる。

また、少彦名神社社務所の上には、「くすりの道修町資料館」がある(入場無料)。町の歴史や薬についての展示があり、気楽に入れる市井の博物館である。薬を丸薬にまるめるための「丸薬製造機」なども展示されていて面白い。

いつもこの時期になると私は、麗々しくくすだま飾りの通りを歩いて、指にべたつく甘いのかきを買ってもらった思い出がよみがえってくる。そのせいか、ふと今日が祭だと気づくと、家で仕事をしていても、フラフラと地下鉄で道修町へと出むいてしまう。最近、空飛ぶ円盤など風変わりな張子をならべた露天などが出て、新作を見るのも秘かな楽しみなのだが、勤労感謝の祝日のため周囲のオフィス街は静かで、夕暮れには寂寥感がこみあげてくる。御堂筋のいちょうも散り、晩秋の寂しさをしみじみと味わうために行くのかもしれない。

「神農祭」が終われば、すぐにカレンダーは12月となる。歳末の慌ただしさが押し寄せてくる。